

日本の水族館とともに

1961年（昭和31）江ノ島水族館に勤務して以来、日本の水族館とともに歩んできた鈴木克美さん。水族館史を本にまとめたり、海外の論文を日本に紹介するなどして、研究できる環境を整えながら、後進を育成し、飼育・展示だけの水族館からの脱却を牽引してきました。輸入文化として取り入れられた水族館が、本当の意味で日本独自のものになるためには、今が正念場と語りました。

鈴木さんの言う通り、口を開けて泳ぐマイワシの大群。ものすごく速いスピードで泳ぐため、写真に撮るのもひと苦労。



鈴木克美さん

すずき かつみ

東海大学名誉教授、農学博士。

1934年静岡県生まれ。東京水産大学卒業後、江ノ島水族館、金沢水族館副館長を経て、東海大学教授、同大学海洋科学博物館館長。専攻は魚類生活史学。主な著書に、『イタリアの蛸壺 海とさかなの随筆』（東海大学出版会 1978）、『潮だまりの生物学』（講談社現代新書586 1980）、『東書選書63 黒潮に生きるもの』（東京書籍 1981）、『丸善ライブラリー28 魚は夢を見ているか』（丸善1991）、『丸善ライブラリー112 水族館への招待 魚と人と海』（丸善1994）、『ものと人間の文化史113 水族館』（2003 法政大学出版局）、『東海大学自然科学叢書 新版水族館学』（共著／東海大学出版会 2010）ほか

水族館史をまとめる

『丸善ライブラリー112 水族館への招待 魚と人と海』（1994）を書いたときは、私にもまだ水族館の歴史に強い関心はありませんでした。水族館の先輩に勧められて、ようやく調べて書く気になったものの、水族館の歴史を書いた書物は、日本にはまだなかったのです。

日本の水族館には、大学臨海実験所の水族館、博覧会水族館、公立水族館、株式会社といういろいろありますが、資料を残す意識と習慣がなかったために少ない資料すら消えていく運命にあります。

私が『ものと人間の文化史113 水族館』（法政大学出版局2003）を出版したのは、長らく水族館に携わった者の責任として、散逸しがちな水族館資料を記録に留めたいと考えたからです。

人類は有史以前から魚を飼っていた

人類が魚を飼っていた痕跡は、古代中国やローマ時代まで遡ることができます。食用と観賞用を兼ねてヘレンウツボを飼っていた証拠が、ポンペイの遺跡から発掘されています。ポンペイは西暦79年

のヴェスヴィオ火山の噴火で埋もれた町ですから、それ以前から、ローマの貴族階級には、アクオリオと呼ばれる施設で、食べるための魚を飼う習慣があったというようになります。

従来、飼われていた魚はウナギといわれてきたが、英語のモレイ・イールはウツボのことと、誤訳が日本の定説となった。古代ローマ人はウツボを好んで食べていたようである。

記録だけでいっただら、紀元前2500年ごろ、バビロニア王朝期にシユメール人が淡水魚を飼っていたことや、中国の周代（紀元前11世紀）の文献にも「家魚」という言葉が見られます。720年に著された『日本書紀』にも、観賞用の池があった、と書かれています。

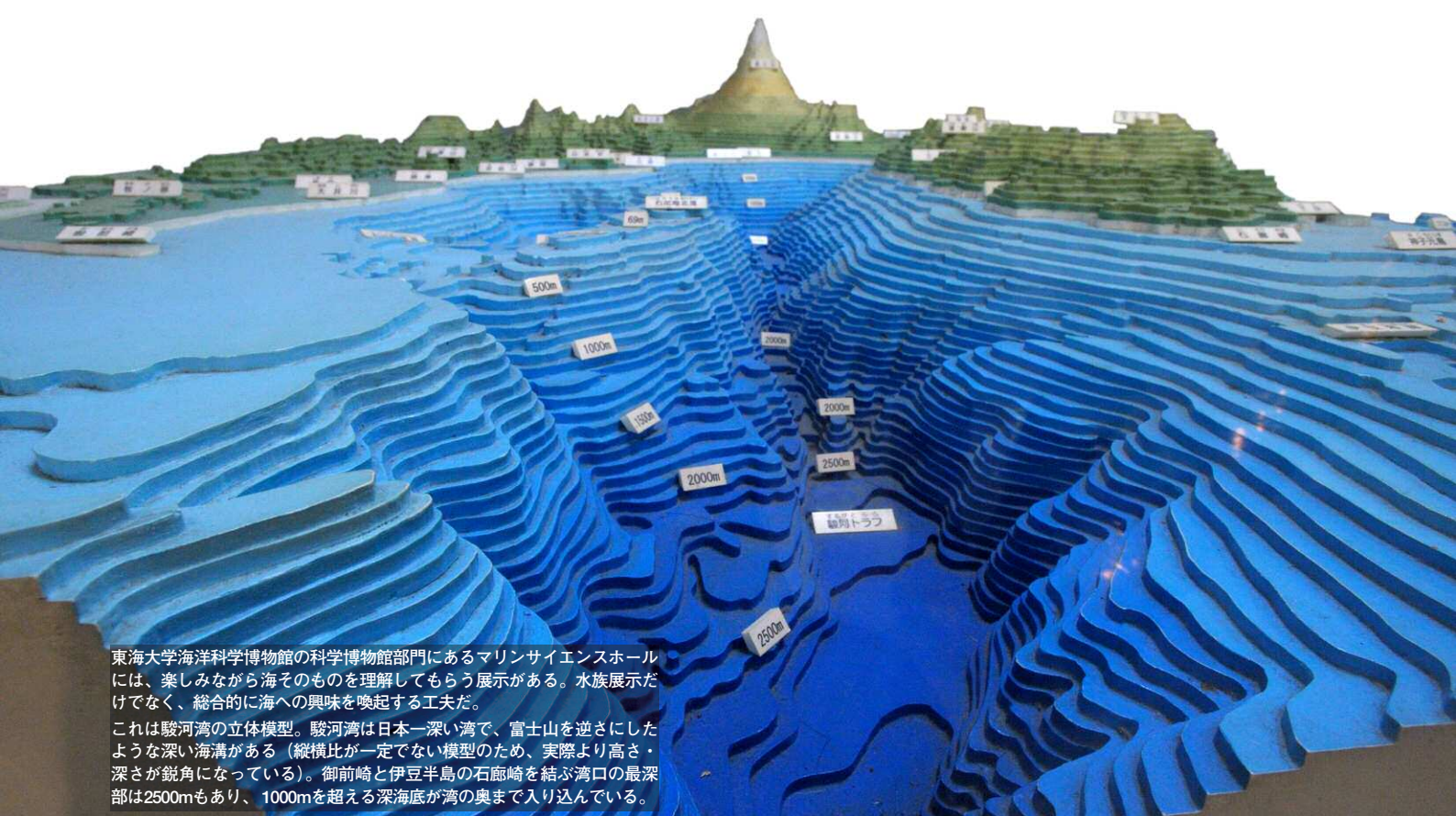
自然志向の思想から

19世紀のイギリス・ビクトリア朝期には産業革命が起こり、経済発展と並行して、自然回帰志向の流行がありました。

1842年（天保13）、〈ビバリウム（Vivarium: 動物飼育器）と命名されたガラス器のセットが、自然志向の思想に乗って大いに流行しました。

ビバリウム

密閉した小容器の中に植物と動物を入れて光を当てておけば、互いの呼吸を助け合って長く生きることができると、ナサニエ



東海大学海洋科学博物館の科学博物館部門にあるマリンサイエンスホールには、楽しみながら海そのものを理解してもらう展示がある。水族展示だけでなく、総合的に海への興味を喚起する工夫だ。

これは駿河湾の立体模型。駿河湾は日本一深い湾で、富士山を逆さにしたような深い海溝がある（縦横比が一定でない模型のため、実際より高さ・深さが鋭角になっている）。御前崎と伊豆半島の石廊崎を結ぶ湾口の最深部は2500mもあり、1000mを超える深海底が湾の奥まで入り込んでいる。

ル・B・ワードが植物雑誌に発表。のちに自分の名前を冠して「ワーディアンケース」として売り出した。

引き続き水槽の「ヒバリウム」、つまりアクア版が登場しました。17世紀のイギリス官僚で、詳細な日記をつけたことで知られるサムエル・ピープスも、1665年のある日、知人宅で熱帯魚のパラダイスフィッシュを飼っているのを見た、と日記に書いています。

現在、水族館の欧米での名称はアクアリウムです。本来の意味からすると、水中植物と水生動物の呼吸が平衡状態にある水槽（バランスド・アクアリウム）をアクアリウムと呼んでいましたが、やがて水槽や水族館そのものも指すようになりました。

アクアリウム
ロバート・ウォリントン は水中植物と水生動物の呼吸に相関関係があることを証明する平衡水槽（バランスド・アクアリウム）について、1849年の学会で発表した。その論文に、初めて「アクアリア（アクアリウムの複数形）」という用語が使われた。その後、アクアリウムに自分の名前をつけて「ウォリントンケース」として売り出している。
アクアリウムの用語が広まったことには、1854年、実際に自分で飼育して観察しながら描いたインキゲンチャクやサンゴの彩色版画を掲載した『ジ・アクアリウム』という名著を、フィリップ・H・ゴッスが出版した影響も大きい。

日本では18世紀半ばに、オランダからきた吹きガラスのビードロ鉢に金魚を入れて眺める風習が始

まっています。国産のガラス器がつくれるようになると江戸の庶民の間にも流行して、金魚を入れたガラスの「金魚玉」を軒先に吊るして楽しんでいたようです。

このように、魚を見て愛でる、飼って楽しむという風習は、洋の東西を問わずに、早くから受け入れられていたのです。

欧化主義から始まった

日本で最初の水族館は、上野公園につくられた「観魚室」です。観魚室と書いて「うをのぞき」と読みました。

上野の山は明治維新後に公園となつて、文部省（当時）系の教育博物館（現・国立科学博物館）ができ、その附属施設として動物園が、そのまた附属施設として1882年（明治15）「うをのぞき」がつくられました。

この教育博物館と動物園の誕生にあたっては、当時の文部省役人であった町田久成と田中芳男が尽力しています。

大英博物館をモデルとする博物館指向があった町田に対して、田中はパリのジャルダン・デ・プランツを志向した自然史博物館を理想としていましたが、共に欧米列強に追いつくために、官僚として文化の向上を図ろうとしたと思わ

れます。

西洋渡来の水族館の魅力は、早くから注目されていて、1897年（明治30）の第2回水産博覧会水族館（兵庫・和田岬水族館）、1903年（明治36）の第5回内国勸業博覧会水族館（大阪・堺水族館）以降、大きな博覧会には付属の集客施設としての水族館が官主導でつくられていました。和田岬水族館の2年後、1899年（明治32）に株式会社経営する浅草公園水族館ができ、こちらは大好評を博して昭和初期まで東京名物になりました。

面白くて、ためになる

水族館は博覧会の集客施設の目玉となつて、たくさんのお客を入れました。国がやることで、社会教育もしようとしたんですね。ただ社会教育という言葉はなかったのですが、水族館は教育にも研究にも実業にも役立つと。それで、建前のようなものですが、これがのちの水族館の表向きの定義のようになったのです。

日本の水族館は、ヨーロッパの水族館にならつて、自然史博物館構想の一環としてスタートしたのですが、博覧会の客寄せに成功したことから、繁華街や観光地の興行施設へと、いつの間にか目的が変化していきました。それでも

「面白くてためになる」オモタメ主義の看板は続きました。

明治の実業家の太田實（1858～1918年）も営利を目的とした水族館を創始した一人です。太田が始めた浅草公園水族館（淺草水族館とは別の施設。1899年（明治32）と大阪の日本水族館（1901年（明治34）は、興行経営であるのにもかかわらず、「水族館は教育と研究と調査に役に立つ」とパンフレットに謳い、当時の新聞も「水族館は教育上、必要なものだ」と書きました。水族館は「面白くてためになる」というのが、のちのちまでキャッチフレーズになりました。

第二次世界大戦が終わって、1947年（昭和22）ごろから、再び水族館がで始めます。そのころできた水族館は大部分が県立、市立なんです。それは水族館が手取り早い集客施設と思われて、地域振興のために役に立つと考えられたからなのでしょう。

このときにつくられた公立の水族館が、「面白くてためになる」ということをどのように受け取っていたかという点、研究室をつくるでもなければ、研究する人もいないし、テーマもないし、研究費も出さなかった。水族館には教育施設としての活動が必要だ、といっても、教育のための準備を整え

たのはずっとあとのことです。

「ためになる」のは何か

博物館学の専門家の矢島雄さんが、「日本は明治になって博物館という施設を西欧から導入することには成功したけれど、博物館を運営する組織については何も考えてこなかった」と書いています。例えば、大阪に水道記念館とい

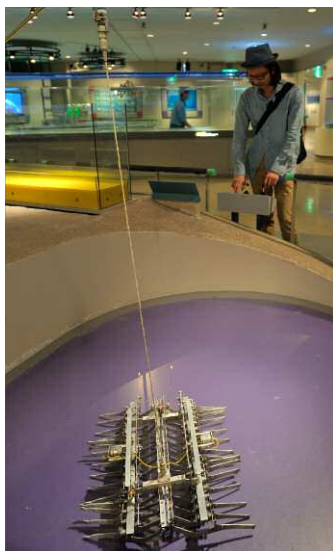
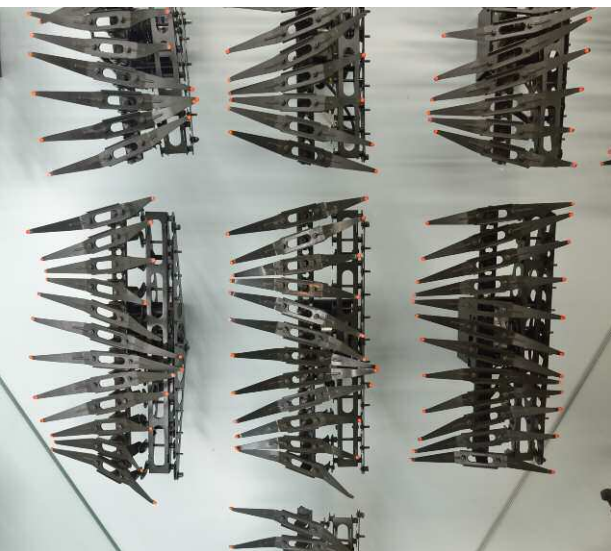
う水道局が運営する施設があります。そこには琵琶湖と淀川水系の自然を再現した淡水魚水族館があって、無料入場できていたのです。天然記念物に指定されるイタセンパラや、絶滅危惧種のアユモドキなど希少種もコレクションしているユニークな水族館でした。ところが最近、市のコスト削減のために水族館は休館になりました。しかし、水族館は単に魚類を飼っている場所ではありません。

この出来事は、水族館の機能、意義、目的、それと価値評価が曖昧なまま今までできていることの一例です。

「面白くてためになる」の「面白い」ほうはわかりやすいですね。

美ら海の活動

例えば、沖縄美ら海水族館（以下、美ら海と表記）の前・館長の内田 詮三さんは、大変頑張って、大きな成果を上げてこられました。ジンベエザメも今ではあちこちにいますからそんなに難しくありません。



上：海の生物の動きを機械で再現した〈メカニカル〉。自分で操縦できるものもある／左：過去40年間にわたって採集された深海生物を集めたゾーンが、2010年7月に新設された／下：マリンサイエンスホールに展示されたロープワークの見本
下段：海洋水槽を泳ぐシロワニ（サメ）。



に思われてしまいますが、そこに至るまでには大変な苦労があったのです。

朝日新聞に著名人が郷里の名所を書く連載があるんですが、沖縄出身の女優さんが「是非、美ら海水族館に来てください」と書いていました。私はそれを見て感慨深く思いました。名所というと、滝とか神社を挙げる人が多い中、水族館を挙げてくれるなんて。それぐらい、美ら海はすごいんです。

内田さんは、沖縄に来る前に福島の照島の水族館、その前に伊東にあった水族館にいましたが、東京外語大学でインドネシア語を学んだ変わり種です。

内田さんはご自分で「前の二つはあまりうまくいきませんでした。が、美ら海はうまくいったので1勝2敗です」と言っているんです。私は3戦全勝だろうと申し上げました。そのときは結果として失敗だったかもしれませんが、それをあとにきちんと生かしている。

トライ&エラーのエラーが、次の成功に生かされているからです。美ら海はまた、深海魚を展示するにはどうしたらいいか、ずっと研究しています。東海大学海洋科学博物館（東海大学社会教育センター）がある駿河湾も深海魚の宝庫ですから、なんとかして深海魚を飼いたい、と思って努力してきたので

すが、どうしてもうまくいかない。深海魚は非常にデリケートで、水族館に持つてくるまでに死んでしまうのです。

魚は普通、浮き袋で水圧を調整しています。ところが浮き袋のない魚もいます。特に深海魚には、普通の浮き袋が役に立ちません。それで浮き袋の中にガスの代わりにワックスエステルを詰めて全体を軽くしていたりと、いろいろ工夫しています。普通の硬骨魚と違って、軟骨魚類のサメには、もともと浮き袋がありませんが、肝臓に非常に軽いワックススクワランがたくさんあって、それで浮力を調整しているのです。浮力調節をどう克服するか、もう一つ、深海からどう引き上げてくるかが、水族館で深海魚の姿を見られるようになる決め手になるでしょう。

成功は成功の母

東海大学海洋学部は1962年（昭和37）にでき、東海大学海洋科学博物館は、海洋学部の附属施設として1970年（昭和45）に開館しました。

海の生きものの研究が陸の上の研究室です。ただでなく、海の中に自ら潜って研究するというスタイルを含めて、水族館でなければできない研究があるんだ、という

ことを実践してきました。イワシを水族館で飼うようになったのも、この水族館が最初です。イワシは魚偏に弱いと書くように、大変、死にやすい魚なんです。なぜ飼えるようになったかというと、カツオ漁業の餌のイワシを生簀で飼っていた沼津が近いので、割と狭い生簀の中で泳いでいるイワシが手に入ったからです。

イワシを飼うんだったら大群で飼わないと意味がありません。水槽には50000〜60000匹ぐらい入れていきます。イワシというのは網ですくうとダメになってしまいうから、バケツですくうんです。ところが最初のころはバタバタ死んで、10日ぐらの内にいなくなってしまうていきました。この時期を過ぎると、何とか生き続けてくれます。そこをどうしたらいいか、それがわかって飼えるようになりました。

水産庁からも見に来て、「イワシが泳いでいるところを初めて見た」と言ってくれました。餌を採るためにカタクチイワシは、大口を開けて泳いでいます。マイワシは鯉のぼりみたいに口を開けます。研究者が半日、熱心にイワシを見ました。

イワシは決して珍しい魚ではありません。しかし、水族館は珍しい魚ばかりを飼って見せる所では

ありません。珍しくないけれど重要な魚がこの水族館にもいないのは変です。

鹿児島市のかごしま水族館は水槽が大きくないので、ジンベエザメも5mに達したら選手交代させて海に放すようにしています。小さい個体と世代交代させているんです。放したジンベエザメには、超短波の発信器をつけて10日間ぐらいい行動を追います。館長の萩野洗太郎さんの発案です。

今までは広い海域を回遊していると思われていましたが、案外、沿岸近くを行ったり来たりしていることがわかりました。こういうことも研究の成果で、水族館の活動はそこまでできています。

ジンベエザメの飼育に初めて成功したのは、美ら海の前身の沖縄国際海洋博覧会水族館です。マグロの飼育に成功したのは、葛西臨海公園水族園が最初です。ジンベエザメもマグロもイワシも、どこかが成功するとその体験を共有し合ってよそでもできるようになってきました。

水族館の場合、失敗は必ず成功に結びつきたい。失敗は成功の母だといいますが、失敗の期間は短いほうがいい。やはり、少なくとも水族館では成功が成功の母のなだと思えます。

水族館人生

私が水族館に入った1956年（昭和31）は、水族館はまだ、大学を出た人間が入るところではありませんでした。

たまたま大学を卒業する2年前に江ノ島水族館（1954年（昭和29））ができて、大変な評判になりました。見に行ったら気に入りました。運良く入ることができました。それが、私の水族館人生の始まりになりました。

江ノ島水族館初代館長は、雨宮育作でした。1877年（明治10）に来日したアメリカの動物学者エドワード・モース博士（1838〜1925年）の直系の弟子で、「これからの水族館は、研究を第一にしないで、はダメだ」と言っていたのです。その先生が指導してできたのが、江ノ島水族館でした。それまでの水族館には、魚をただ飼っているだけの飼育作業員がいたのですが、雨宮先生は大学出を6人採用して、水族館に研究機能をもたせようとされました。外国の論文の輪読をしたりしたのも、当時としては画期的なことでした。

私は江ノ島水族館に8年間いて、その後、金沢水族館の立ち上げにかかりました。ちやうど、「とる漁業からつく

る漁業」と栽培漁業が国策になって、東京大学の佐伯有常先生たちが「砂濾過装置が水産養殖の発展に役立つだろう」と研究をしてみました。砂濾過装置は、単に水を濾してきれいに行っているだけでなく、バクテリアの働きを利用した生化学作用などがあると突き止められたのです。

私は金沢の水族館に、この理論を取り入れて濾過装置をつくりました。金沢の水族館は山の上につくられたので、海の魚の水族館を山の上につくるのは、非常に難しいことだと思えたのでしよう。私は全然心配していませんでしたが、「大丈夫か」とずいぶん危惧されたのを思い出します。結局、その濾過装置は、金沢水族館が閉館するまで36年もちました。そんなことをしているうちに、水族館が一生の仕事になってしまいました。

これからの水族館

陸から眺める海は、海そのものではありません。私たちは普段、海を見ていると思いつながら、大気と水の両世界を隔てる海面を見てください。そう気づけば、水族館の巨大なガラスで囲まれた水槽は、陸に立って水の世界を横から眺められる唯一の場所だといえる

かもしれません。だからたぶん、私たちは水族館に惹かれるのでしよう。

水族館で見るのは疑似体験の海です。水族館は、自然を消費して成り立っています。水族館で自然保護教育をするのは結構難しいことですが、豊穡の海、楽観に満ちた海を思わせる水族館で、海の危機と衰退を見せ、それを防ぐ決意や方法を語りかけるのはなかなかハードルが高い役割です。

そのハードルを越えるには、水の世界はあくまでも清らかであってほしいという、古来から日本人に受け継がれてきた漠然とした水の世界への憧れが、役立つかもしれません。

水族館は、そもそも日本人にとっては異文化でした。それが明治の文明開化期に西欧から輸入されて以来、約130年経ちました。世界最初の水族館は、イギリス・ロンドンに1853年（嘉永6）にできました。日本最初の水族館は、1882年（明治15）にできています。今思えば、29年しか変わらないのです。日本の水族館は日本に根づいて、そろそろ独自の文化を醸成してもいいのではないのでしょうか。

取材：2013年3月29日



16本の鋼鉄の柱で支えられた全面ガラス張りの大水槽、東海大学海洋科学博物館の〈海洋水槽〉。見る方向によって「サンゴ礁の海」、「海藻の海」、「砂底の海」、「岩礁の海」の4つの海中景観に分けられている。展示されている魚類は、それぞれ表層・中層・底層に分かれて活動する。

東京 8 / 19

- 1882 観魚室 (うのをぞき) (上野公園)
1885 (浅草) 水族館 (浅草)
1890 第3回内国勲業博覧会水族館 (上野公園)
1899 (浅草公園) 水族館 (浅草)
1907 東京勲業博覧会教育水族館 (上野公園)
1932 第4回発明博覧会水族館 (上野公園)
1935 井の頭公園動物園水族館 (井の頭)
1952 東京都恩賜上野動物園海水水族館 (上野公園)
1958 東京都多摩動物園水族館 (日野市)
1964 東京都恩賜上野動物園爬虫類館 (上野公園)
1975 27 都立井の頭恩賜自然文化園水生生物館 (三鷹市)
1978 28 東京タワー水族館 (芝公園)
1978 29 サンシャイン国際水族館 (現・サンシャイン水族館) (池袋)
1981 30 小笠原海洋センター (小笠原村)
1983 板橋区立淡水魚水族館 (板橋区)
1989 31 東京都葛西臨海水族園 (江戸川区)
1991 32 しながわ水族館 (品川区)
2005 33 エプソン品川アクアスタジアム (品川区)
2012 34 すみだ水族館 (墨田区)

神奈川 7 / 23

- 1890 東京大学理学部附属三崎臨海実験所水族館 (三崎村)
1902 水族館 (川口村)
1906 横浜教育水族館 (横浜市)
1925 江ノ島水族館 (川口村)
1928 横浜 (磯子) 水族館 (横浜市)
1929 逗子水族館 (逗子海岸)
1932 東京大学理学部附属三崎臨海実験所水族館 (三崎村)
1935 復興記念横浜大博覧会水族館 (横浜市)
1949 三笠水族館 (横浜賀市)
1953 35 観音崎自然博物館 (横浜賀市)
1953 鎌倉水族館 (鎌倉市)
1954 江ノ島水族館 (片瀬海岸)
1955 真鶴水族館 (真鶴町)
1957 江ノ島マリナランド (藤沢市)
1958 36 横浜市立開門小学校附属海水水族館 (横浜市)
1959 箱根自然博物館水族館 (元箱根町)
1964 よみうりランド海水水族館 (川崎市)
1968 37 京急油壺マリナパーク (三浦市)
1970 神奈川県フッシャングラウンド水族館 (相模原市)
1973 38 箱根園水族館 (箱根町)
1979 39 相模原市立相模川ふれあい科学館 (相模原市)
1993 40 横浜八景島シーパラダイス・アクアミュージアム (横浜市)
2004 41 新江ノ島水族館 (藤沢市)

新潟 4 / 16

- 1916・20 (能生) 水族館 (能生村)
1931 鯨波水族館 (鯨波)
1931 上越線全通記念博覧会・寺泊水族館 (寺泊町)
1932 柏崎水族館 (柏崎町)
1934 直江津水族館 (直江津町)
1934 五智水族館 (春田村)
1938 新潟水族館 (鳥屋野村)
1949 直江津水族館 (直江津町)
1949 糸魚川水族館 (糸魚川町)
1954 柏崎水族館 (柏崎町)
1958 42 尖閣湾潟島水族館 (相川町)
1967 開港100年地震復興記念新潟大博覧会水族館 (新潟市)
1976 瀬波水族館 (村上市)
1980 43 上越市立水族博物館 (上越市)
1983 44 寺泊町立水族博物館 (寺泊町)
1990 45 新潟市水族館マリニピア日本海 (新潟市)

富山 1 / 3

- 1913 富山県連合共進会魚津水族館 (魚津町)
1953 雨晴水族館 (高岡市)
1954 46 魚津水族館 (魚津市)

石川 1 / 3

- 1932 産業と観光の大博覧会水族館 (金沢市)
1963 金沢水族館 (金沢市)
1982 47 のとじま臨海公園水族館 (能登島町)

福井 1 / 3

- 1928 高濱水族館 (高濱町)
1949 敦賀市宮松原水族館 (敦賀市)
1959 48 越前島水水族館 (三国町)

山梨 1 / 1

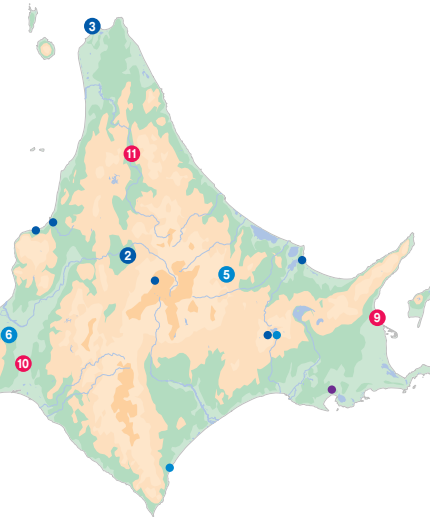
- 2001 49 山梨県立富士湧水の里水族館 (忍野村)

長野 1 / 7

- 1931 上諏訪町水族館 (上諏訪町)
1940 長野県水産指導所附属水生生態実験室水族館 (下諏訪町)
1960 野尻湖水族博物館 (信濃町)
1967 諏訪市遊園地水族館 (諏訪市)
1967 明科町立水族館 (明科フィッシュランド) (明科町)
1967 野尻湖ターミナル水族館 (信濃町)
1993 50 蓼科アミューズメント水族館 (茅野市)

岐阜 1 / 2

- 1950 岐阜市淡水魚水族館 (岐阜市)
2004 51 岐阜県世界淡水魚園水族館 (アクア・トトぎふ) (各務原市)



香川 1 / 3

- 1930 栗林公園動物園水族館 (高松市)
1968 マリンパーク魚類博物館 (庵治町)
1969 87 屋島山上水族館 (シーパレス) (高松市)

愛媛 1 / 2

- 1935 長浜水族館 (長浜町)
1997 88 虹の森おさかな館 (松野町)

高知 2 / 9

- 1931 桂浜水族館 (市浦戸)
1932 手結海洋地下水族館 (夜須村手結)
1932 種崎水族館 (種崎海岸)
1937 土佐水族館 (三里村)
1952 手結海洋地下水族館 (夜須町)
1956 宿毛水族館 (宿毛市)
1972 宿毛市海洋博物館 (宿毛市)
1975 89 高知県立足摺海洋館 (土佐清水市)
1994 90 桂浜水族館 (高知市)

福岡 1 / 8

- 1910 第13回九州沖繩八県連合共進会箱崎水族館 (馬出町)
1928 田中水族館 (不明)
1951 志賀島水族館 (志賀町)
1954 和布刈水族館 (門司市)
1956 福岡水族館 (福岡市馬出)
1968 九州大学農学部水産実験所附属水産増殖科学館 (津屋崎町)
1989 91 海の中道海洋生態科学館 (マリンワールド海の中道) (福岡市)
1995 ネイブルランド水族館 (大牟田市)

佐賀 0 / 1

- 1954 呼子水族館 (呼子町)

長崎 4 / 9

- 1953 佐世保水族館 (佐世保)
1959 長崎水族館 (長崎市)
1959 西海遊園地水族館 (佐世保)
1973 野母崎マリナランド海洋博物館水族室 (野母崎町)
1976 吉岐生態水族館 (芦辺町)
1991 92 海のふるさと館しんうおのめふれランド (新島目町)
1994 93 西海パール・シー・センター水族館 (九十九島水族館「海きらら」) (佐世保市)
1994 94 ゆうゆうランド干拓の里むつごろう水族館 (諫早市)
2001 95 長崎ペンギン水族館 (長崎市)

熊本 1 / 6

- 1938 九州大学理学部附属天草臨海実験所水族館 (苓北町)
1955 天草産業観光大博覧会水族館 (本渡市)
1959 熊本海水水族館 (熊本市)
1966 天草海産自然水族館 (現・天草いかワールド) (本渡市)
1967 竜宮水族館 (松島町)
1982 96 海中展望船まつしま (わくわく海中水族館 シードーナツ) (松島町)

大分 1 / 7

- 1921 第14回九州沖繩八県連合共進会水族館 (大分市)
1928 別府市中外産業博覧会水族館 (別府市)
1937 六勝園水族館 (別府市)
1957 別府水族館 (別府市)
1964 大分生態水族館 (マリニパレス) (大分市)
1972 日田淡水魚センター (淡水魚回遊水族館) (日田市)
2004 97 大分マリニパレスうみたまご (大分市)

宮崎 4 / 6

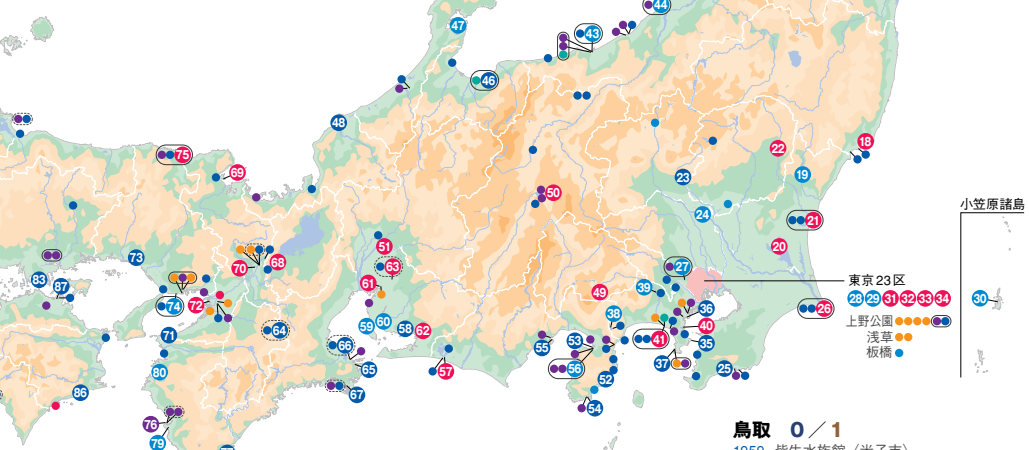
- 1957 青島水族館 (宮崎市)
1991 98 高千穂峡淡水魚水族館 (高千穂町)
1992 こどものくに淡水熱帯魚館ビラルク (宮崎市)
1995 99 大淀川学習館 (宮崎市)
1995 100 すみえファミリー水族館 (延岡市)
1995 101 宮崎県出の山淡水魚展示館 (小林市)

鹿児島 2 / 6

- 1956 桜島水族館 (桜島村)
1958 鹿児島鴨池動物園水族館 (鹿児島市)
1972 瀬戸内町宮海中公園センター竜宮 (水族室) (瀬戸内町)
1972 鴨池マリナパーク (鹿児島市)
1997 102 こがしま水族館「いおワールド」(鹿児島市)
1998 103 奄美海洋展示館 (名瀬市)

沖縄 1 / 3

- 1975 沖縄国際海洋博覧会海洋生物園水族館 (本部町)
1977 沖縄こどもの国水族館 (沖縄市)
2002 104 沖縄美ら海水族館 (本部町)



愛知 6 / 9

- 1910 名古屋教育水族館 (名古屋・築港南)
1936 東京大学農学部附属水産実験所新舞子水族館 (旭村)
1956 58 蒲郡市竹島水族館 (蒲郡市)
1963 名古屋市東山総合公園事務局動物園水族館 (名古屋)
1980 59 南知多ビーチランド (美浜町)
1982 60 碧南海浜水族館 (碧南市)
1992 61 名古屋港水族館 (名古屋)
1993 62 豊川市赤塚山公園ぎょランド (豊川市)
1993 63 名古屋市東山動物園世界のメダカ館 (名古屋市)

三重 4 / 9

- 1928 二見浦水族館 (二見町)
1933 浜島水族館 (浜島町)
1949 赤目淡水魚水族館 (名張市)
1954 64 赤目四十八滝サンショウウオ飼育場 (日本サンショウウオセンター) (名張市)
1955 65 鳥羽水族館 (鳥羽市)
1956 三重県浜島水産試験場水族室 (浜島町)
1966 二見浦総合植物園水族館 (二見町)
1966 66 二見夫婦岩シーパラダイス (二見町)
1970 67 志摩マリナランド (阿児町)

滋賀 1 / 2

- 1961 滋賀県立琵琶湖文化館水族館 (大津市)
1996 68 滋賀県立琵琶湖博物館 (草津市)

京都 2 / 7

- 1895 第4回内国勲業博覧会水族室 (岡崎公園)
1908 京都市記念動物園水族館 (岡崎公園)
1953 京都市動物園海水水族館 (京都市・岡崎公園)
1958 天橋立水族館 (宮津市)
1964 八潮遊園海水水族館 (京都市)
1989 69 宮津エネルギー研究所水族館 (丹後魚つ知館) (宮津市)
2012 70 京都水族館 (京都市下京区)

大阪 2 / 7

- 1901 日本水族館 (難波)
1903 第5回内国勲業博覧会水族館 (堺市)
1933 大阪天王寺動物園水族館 (天王寺)
1957 71 みさき公園自然動物園水族館 (堺町)
1968 通天閣フィッシュセンター (大阪市浪速区)
1990 72 大阪・海遊館 (港区)
1995 水産記念館 (淀川区) (※一時休館中だが当分の間開館するため、運営している水族館から除いた)

兵庫 3 / 13

- 1897 第2回水産博覧会水族館 (和歌山)
1902 水族館 (淡川町)
1929 宝塚動物園爬虫類・淡水魚類館 (宝塚市)
1930 神戸海港博覧会水族館・湊川水族館 (神戸・湊川公園)
1934 瀬戸日和山遊園水族館 (豊岡市)
1935 阪神水族館 (神戸市)
1949 日和山天然水族館 (豊岡市)
1957 明石市立水族館 (明石市)
1957 神戸市立須磨水族館 (神戸市)
1956 73 姫路市立水族館 (姫路市)
1967 宝塚ファミリーランド立体動物園水族館 (宝塚市)
1987 74 神戸市立須磨臨海水族館 (神戸市)
1994 75 城崎マリワールド自然水族館 (豊岡市)

奈良 0

和歌山 5 / 9

- 1930 76 京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所水族館 附属水族館 (白浜町)
1934 南白浜水族館 (瀬戸鉛山村)
1934 東白浜水族館 (瀬戸鉛山村)
1958 新和歌浦水族館 (和歌山市)
1965 串本水族館 (串本町)
1969 77 太地町立じらの博物館 (太地町)
1978 78 串本海中公園センター (串本町)
1979 79 アドベンチャーワールド (白浜町)
1982 80 和歌山県立自然博物館 (海南市)

鳥取 0 / 1

- 1959 皆生水族館 (米子市)

島根 2 / 8

- 1913 大社教育水族館 (杵築町)
1928 島根教育水族館 (不明)
1931 美保関水族館 (美保関町)
1953 大社水族館 (大社町)
1954 浜田市立水族館 (浜田市)
1955 美保関水族館 (美保関町)
2000 81 島根県立しまね海洋館 (浜田市)
2001 82 島根県立宍道湖自然館ゴビウス (平田市)

岡山 1 / 4

- 1928 大日本勲業博覧会水族館 (鹿田駅跡)
1930 三幡軽鉄 (株) 附属水族館 (岡山港)
1953 83 市立玉野海洋博物館 (玉野市)
1964 津山市科学教育博物館水族室 (津山市)

広島 1 / 6

- 1933 広島文理科大学理学部附属向島臨海実験所水族館 (向島町)
1958 宇品天然水族館 (広島市)
1959 広島県宮島水族館 (宮島町)
1964 尾道城水族館 (尾道市)
1984 84 町立宮島水族館 (宮島町)
1989 フローティングアイランド水族館 (マリナパーク境ヶ浜) (尾道市)

山口 1 / 4

- 1925 大谷天然水族館 (萩町 (萩市))
1925 楽天地水族館 (萩町 (萩市))
1956 下関市立下関水族館 (下関市)
2001 85 下関市立しものせき水族館「海響館」(下関市)

徳島 1 / 3

- 1958 鳴門自然水族館 (鳴門市)
1960 86 日和佐町宮水水族館 (現・日和佐うみがめ博物館力レッタ) (日和佐町 (美波町))
1989 海部町うなぎ水族館イランド (海部町)

Legend for aquarium symbols:
- Blue circle: 所在地不明
- Yellow circle: 改称、移管した同一の水族館
- Green circle: 関係性が不明な水族館
- Red circle: 開館している水族館
- Purple circle: ※数字は水族館リストの番号
- Grey circle: 閉館した水族館

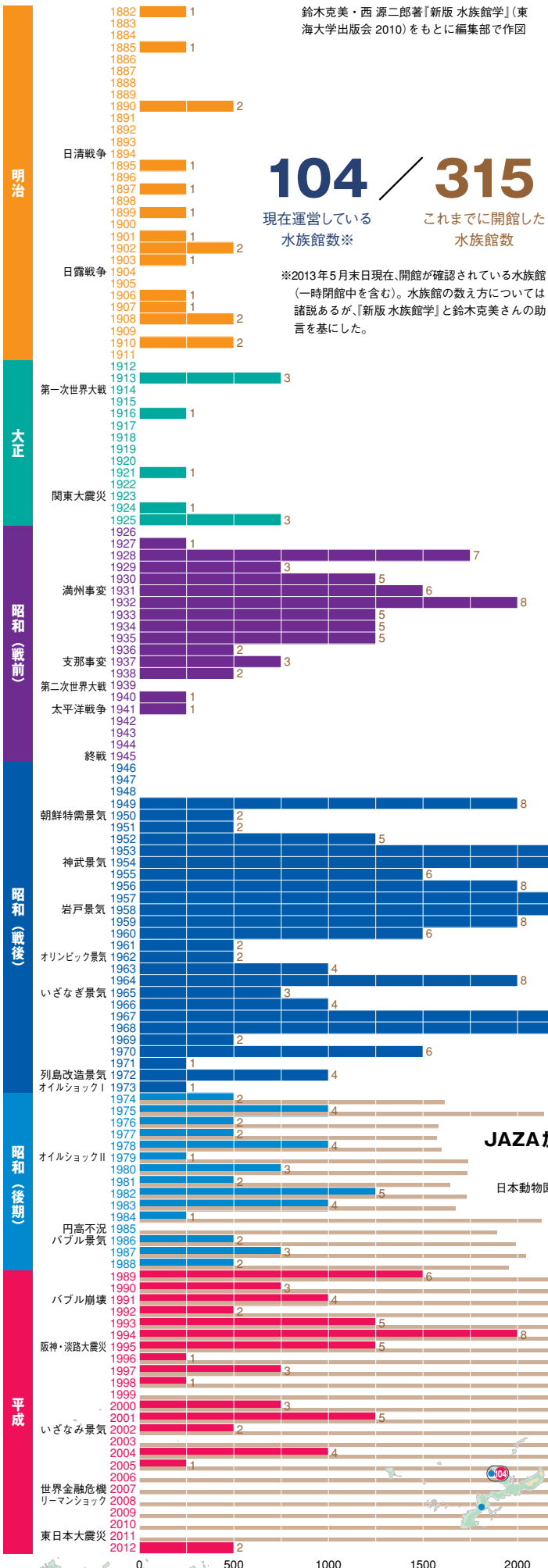
小笠原諸島

東京 23区

- 23 上野公園
23 浅草
31 板橋

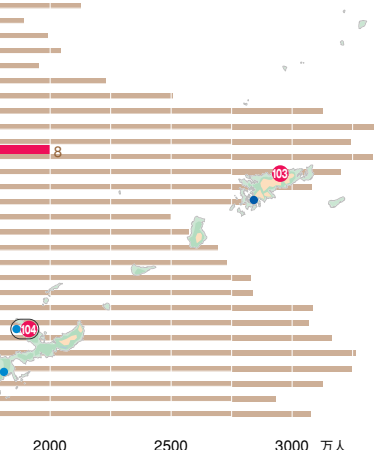
日本の水族館 (1882~2012年)

これまでに開館した水族館の設立年と所在地

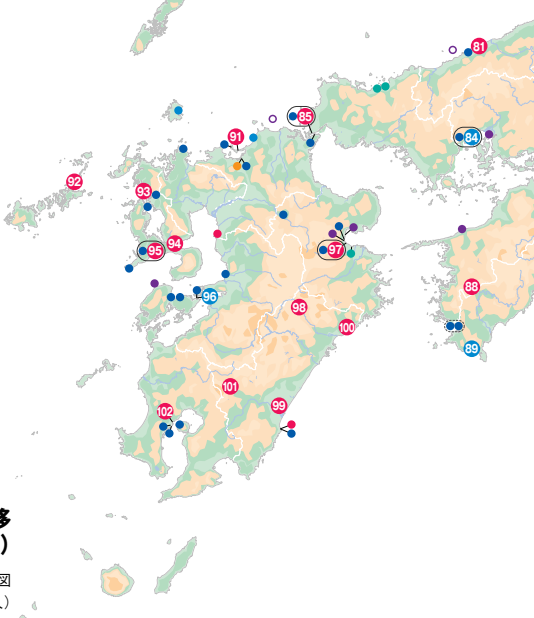


JAZA加盟水族館総入館者数の推移 (1974~2011年)

日本動物園水族館協会(JAZA)年報より編集部で作図 ※薄茶色のグラフ(単位:万人)



- 北海道 11 / 28**
 - 1908 北海道水産共進会水族館(小樽区)
 - 1931 北海道大学理学部附属厚岸臨海実験所水族館(厚岸町)
 - 1936 函館水族館(函館市)
 - 1953 1 北海道立室蘭水族館(室蘭市)
 - 1953 江差町営水族館(江差町)
 - 1955 増毛水族館(増毛町)
 - 1956 財団法人オホーツク水族館(網走市)
 - 1958 市立小樽水族館(小樽市)
 - 1958 余市町立天然水族館(余市町)
 - 1960 天人峡水族館(東川町)
 - 1960 阿寒水族博物館(阿寒町)
 - 1962 藻岩山水藻園水族館(札幌市)
 - 1963 留萌水族館(留萌町)
 - 1967 2 旭川市旭山動物園(旭川市)
 - 1967 札幌市円山動物園水族室(札幌市)
 - 1968 3 稚内市立ノシャップ寒流水族館(稚内市)
 - 1974 4 おたる水族館(小樽市)
 - 1974 瀬棚町水族館(瀬棚町)
 - 1975 町立阿寒湖畔水族資料室(阿寒町)
 - 1978 5 留辺蘂町立山の水族館郷土館(現・おんねゆ北の大地の水族館)(山の水族館)(留辺蘂町)
- 秋田 1 / 7**
 - 1952 象潟町水族館(象潟町)
 - 1954 男鹿水族館(男鹿市)
 - 1957 岩館水族館(八森町)
 - 1959 入道崎水族館(男鹿市)
 - 1967 象潟水族館(象潟町)
 - 1967 秋田県立男鹿水族館(男鹿市)
 - 2004 15 男鹿水族館 GAO (男鹿市)
- 山形 2 / 7**
 - 1929 加茂町水族館(加茂町)
 - 1932 鼠ヶ関水族館(念珠関村)
 - 1956 16 鶴岡市立加茂水族館(鶴岡市)(庄内浜加茂水族館に改称した後、1974年に再び旧館名に改称)
 - 1964 庄内浜加茂水族館(鶴岡市)
 - 1967 山形ハイドリウムランド水族館(山形市蔵王)
 - 1968 ねずがせきビーチセンター水族館(温海町)
 - 1994 17 タキタロウ水族館(旭村)
- 福島 1 / 3**
 - 1958 白鷺会勿来水族館(勿来町)
 - 1968 鳥島ランド(いわき市)
 - 2000 18 アクアマリンふくしま・ふくしま海洋科学館(いわき市)
- 茨城 3 / 5**
 - 1952 茨城県大洗都市公園事務所大洗水族館(大洗町)
 - 1970 「海のこども国」大洗水族館(大洗町)
 - 1986 19 山方町立淡水魚館(自然生感観察施設)(山方町)
 - 1989 20 鹿ヶ浦町水族館(かすみがうら市水族館)(鹿ヶ浦町)
 - 2002 21 アクアワールド茨城県大洗水族館(大洗町)
- 栃木 1 / 3**
 - 1949 日本両棲類研究所(日光市)
 - 1988 小山海洋水族館(小山)
 - 2001 22 栃木県なかがわ水遊園(栃木市)
- 群馬 1 / 2**
 - 1968 23 桐生ヶ丘公園水族館(桐生市)
 - 1987 群馬県水産学習館(館林市)
- 埼玉 1 / 1**
 - 1983 24 県営さいたま水族館(羽生市)
- 千葉 2 / 8**
 - 1932 農林省水産講習所小湊実験場水族館(小湊村)
 - 1949 金谷水族館(竜宮城)(金谷村)
 - 1954 銚子水族館(銚子市)
 - 1963 京成マリナパーク大吠埼水族館(銚子市)
 - 1965 千葉県水産共同実習所水族館(館山市)
 - 1968 行川アイランド(勝浦市)
 - 1970 25 鴨川シーワールド(鴨川市)
 - 1993 26 大吠埼マリナパーク(銚子市)



静岡 6 / 19

- 1930 中之島水族館(内浦村)
- 1933 東京文理科大学理学部附属下田臨海実験所水族館(下田町)
- 1933 熱海水族館(熱海町)
- 1935 三津淡島水族館(内浦村)
- 1937 袖師水族館(清水市)
- 1941 三津天然水族館(内浦村)
- 1950 沼津市営水族館(沼津市)
- 1951 熱海水族館(熱海市)
- 1954 興嘗弁天島水族館(舞阪町)
- 1957 52 熱川バナナワニ園(東伊豆町)
- 1960 浜松市動物園水族館(浜松市)
- 1961 伊東水族館(伊東市)
- 1964 53 淡島海洋公園水族館(あわしまマリナパーク)(沼津市)
- 1965 地球儀大温室地下道水族館(伊東市)
- 1967 54 フンタ下田海中水族館(下田市)
- 1970 55 東海大学海洋科学博物館(静岡市)
- 1977 56 伊豆三津シーパラダイス(沼津市)
- 1986 伊豆アンディランド(河津村)
- 2000 57 浜名湖体験学習施設「ウオット」(舞阪町)